

dont 関係節における情報構造について

— 受動態と倒置を中心として —

谷口永里子
(京都大学大学院)

伝統的に、発話における情報構造は一つであり、従属節には情報構造がないと主張されてきた。しかし Partee (1996) は従属節中にも情報構造を認めている。Fuchs (1997) は従属節中の情報構造の存在を暗に認め、関係節内の主語の位置を決定する要因の一つとして、主語や動詞のテーマ化・レマ化を挙げている。しかし Fuchs (1997) による説明には不十分な点があり、特に倒置された場合の動詞句のテーマ性についての記述が不明確である。

本発表では、従属節の中でも受動態や倒置を含む dont 関係節に絞って分析し、従属節内の情報構造の存在を確認した上で、Fuchs (1997) の主張の妥当性を検討する。

まず dont 節で受動態が用いられる場合における、従属節内のテーマについて考察する。ここでは、受動態主語と先行詞の語彙的な関係を分析することで、受動態が従属節の下位テーマにあたることを示す。

次に、dont 節で主語と動詞の倒置が起きた場合の、前置された動詞のテーマ性と後置された主語のレマ性について考察する。ここでは多数の例を分析することで、実際には、Fuchs (1997) の「倒置によって前置された動詞句のテーマ性が高い」という主張に該当する例が少ないことを示す。その上で、むしろ倒置を引き起こす要因として「意味内容が希薄でレマ性の低い要素を節末に位置付けることを回避する」という消極的な理由が強く働く例が多いことを指摘する。